

御車さし出て、ごせんなどまいりあつまるほどをりえりがほなるまぐれうちそ、ぎて木の葉
 さそふ風あはたゝえう吹はらひたるに、おまへにさぶらふ人々ものいとゝ心ぼそくて、すこし
 ひまありつる袖どもうるほひわたりぬ、

〔源氏物語〕はつまぐれいつしかとけしきだつにいかゞおほしけん、かれより、

木がらしのふくにつけつ、待しまにおぼつかなさのころもへにけり、と聞え給へり、をりも
 あはれに、あながちに忍びかき給へらん、御心ばへもにくからねば、御つかひとゝめさせ給て、
 略聞えさせてもかひなき物ごりにこそ、むげにくづをれにけれ、身のみものうきほどに、
 あひみずてまのぶる比の涙をもなべての秋の時雨とやみる、こゝろのかよふならば、いかに
 ながめの空も、物わすれし侍らんなど、こまやかに成にけり、

〔見た京物語〕時雨のけしきは江戸に勝れり、月と時雨たちまちにかはる、山近ければなり、

〔新撰字鏡〕雨雷力救反、自屋水流、下阿米志太雷

〔倭名類聚抄〕一雷雲雨、雷説文云、雷、屋簷前雨水流下也、音溜、和名阿

〔類聚名義抄〕七雷音留マシタリ

〔拾玉集〕百首和歌 述懐

かきくらしはれぬ思ひのひまなきにあめしづくともながれける哉

〔倭名類聚抄〕一潦雲雨、潦唐韻云、潦、音老、和名爾、八雨水也、

〔類聚名義抄〕五潦音老、又明倒反、ニハタツミ

〔運步色葉集〕伊卒イ尔サラム水

〔書言字考節用集〕一乾地、潢潦黄老二音、文選注、行潦朱子云、道上

〔倭訓栞〕前編二十にはたづみ、和名抄に潦字をよみ、文選に潢潦をよめり、朱説に道上无源之水